

意見交換会記録

肢体不自由部門

Q

BGMは集団活動ではうまく使われているが、一人一人違う活動を行っている個別のプログラムではどうだろうか？

A

BGMを使い始めてまだ回数が少ないが、BGMによって緊張が入るなどの報告はない。しかし、合わなくなった場合には変えていかなければならない。小～高までの誰にでも合うような曲を選び、個別の始めはアップテンポ、その後はトーンが下がるように工夫している。今後も様子を見ながら検討が必要だと思う。

Q

肢体のⅠ類型高校生を担当している。集団メニューは使っていない。東ではⅡ類型も集団でやっているのか？

プールと陸上での時間の指導の関連について、自分は指導の中でプールの水圧で呼吸を意識し、陸上での発声の改善をねらっているが、東ではどうか？

A

集団が成立しているのは小学部。中高は重度で医療的ケア対応の生徒が多く、欠席も多いため集団が作りにくい。今のプログラムは小がメインで、中高は集団が作れる体制になってから考えたい。

A

小学部では、リラクゼーション、教師との信頼関係づくりを主にしている。水中で浮力を利用して歩けていた子が、陸上で歩けた事例がある。

集団プログラムは、Ⅲ類型のヘッドコントロールが必要な子ども達も使えるよう作っており、すべての子どもにはあてはまるわけではない。個別に柔軟に対応できればよいと考えている。

知的障害部門

Q

以前、東支援学校小学部に勤務していた頃、対象児が隣のクラスにいた。様子などを見ると、もう少し早い段階から取り組んでいたのではと思う。気持ちを共有することはやっているが、実践したことをまとめることで、教員間で共有できる。

ミックスジュースの SCRIPT での要求と援助要求だが、「手伝って」が1回しか出てこなかった。SCRIPTは言語の指示に応えるのがメインだったが、PECSの指導との関連を知りたい。

スクリプトを繰り返し行うことで流れを覚え、指示される前に動くようになるが、わかって動けばいいのか？言語の指示で動くことが大事なのか？

A

今まで、「お願い」が出ると同時に噛みついたり叩いたりということが起こっていた。そのような状況が起こらないようにするために環境を整えることを大切にしたら結果、コミュニケーション行動が減る結果になってしまった。そこで6年生になって初めてPECSに取り組んだ。

コミュニケーションには表出と理解の両面があるが、PECSでは「表出」の指導が主であった。そこでスクリプトの方で「理解」に取り組んだ。

スクリプトでは文脈の理解が大切である。流れが分かって行動できるようになってきたところに、一つ一つ「包丁を取る」「スイッチを入れる」など言語で意味づけすることで、言語と結びついていくことを大切にしている。

Q

コミュニケーションの資料とビデオを見て、目的と手段の両面から指導されていて興味をもった。ミックスジュースを作るところで、どの場面でも使える概念というものを獲得して欲しいと思った。名詞、動作、感情・・・と、難しくなる。例えばいろいろな種類の牛乳や容器を試してみるなどしてはどうか。言語指示はよく理解していると思われるが、概念形成のための今後の予定を聞きたい。

A

本時では「牛乳を持ってきて」で牛乳を持ってこれたが、前時では缶詰を持ってきた。このスクリプトでできたことが他の場面で行えるかどうか分からない。汎化していくことに難しさがあり、複数のスクリプトを行っていくことが必要なのではないかと思う。「ちょっと違うけど同じような文脈」を生活の中で少しずつ経験させていくことが、概念形成につながると思う。ふだん給食時には、「今日のあいさつは誰々の日。」と言われただけで、自分から「いただきます。」と言えるのに、本時ではプロンプトがないとできなかった。しかし、このスクリプトを獲得すれば、彼の中で「いただきます」「ごちそうさま」の概念は少し広がるはず。そういうことの積み重ねを続けていきたい。

感想

一番魅力的だったのが、子どもと先生との情動がしっかりと通っているシーン。子どもにとっては、目に見えないが大事なところではないか。いろいろな手法を使い実態も把握しながら指導しているが、ああいう「共有」の場面を織り込むと、もっと理解が進むのではないか。

Q

「共有」はSCERTS（サーツ）モデルの「目的」の部分。我々とはかく「手段」に目が

行きがちだが、「目的」の部分について、少し説明して欲しい。

A

目的の中の「共同注意」について補足説明する。サーツでは、情動・注意・意図の共有の3つを「共同注意」と言っている。コミュニケーションの目的として、ニーズを満たすために相手に何かをさせたりやめさせたりすることを「行動統制」、注意を自分にひきつけ維持することを「社会的相互作用」、パートナーの注意を物や出来事に向けさせることを「共同注意」と呼び、コミュニケーションを大まかに3つに分類している。

Q

資料の23ページで、「カードに表されていないものがほしいとき、カードがないときはどのように指導するのか考えていく必要がある」とあるが、このあたりも含めて、もう少し対象児の様子を教えて欲しい。

A

他者への信頼感が育ち、カードがないときでもコミュニケーションしようとする力が育ってきた。そこでブックの中のセンテンスカード（「てつだって ください」「を ください」）の写真を支援者が持っておき、ブックがない場所でコミュニケーション行動が起こったらそれを提示して「なに？」と問うようにした。すると、それを手掛かりにして言葉で伝えることが増えてきた。ただにあたる部分は獲得していないものだと難しいので、1つ1つ共有しながら獲得させていかないといけない。

事業全体について

Q

抽出や個別の指導についての取り組みの工夫があれば教えてほしい。

A

B小は「時間における指導」はないが、必要な場合には個別指導の時間を捻出している。例えば、「ことば・かず」の時間に他の児童に自立課題を与えておき、1対1の個別の指導場面を設定するなど。

B中では「個別学習」の時間に「時間における指導」を行っている。

指導助言

岡山県教育庁特別支援教育課 近藤指導主事

学習指導要領に絡めながら説明していきたい。

指導計画の作成と内容の取り扱いについては、実態把握した上でPDCAサイクルにのせて指導を行い、丁寧に見ていく必要がある。本校の取り組みは、その点でいねいになされていると感じる。もちろん、様式はまだ試案のものもあるが、学校全体で意見が交わされ、引き継いだ時に使いやすいものを探る取り組みは大事である。また、これが今年だけで終わるものではなく、引き継ぎよりよい東支援バージョンを目指すきっかけとなっていくと思う。

次に、実態把握にもとづき、長期的、短期的目標を、段階的に取り上げるということが重要である。子どもの状態をよく観察して、子どもとつながり合い、その時のその子の状態を感じながら指導していく必要がある。たとえば、今日の知的障害部門の実践のように、「包丁」がわかりにくければ、「トントン」という言葉を付け加えてみるなどである。子どもの状態は、その時々で違い、最初の計画通りには行かないこともある。状態に合わせて柔軟に対応し、次につなげていくことが大切である。

具体的な指導内容設定については 児童生徒の実態に応じた指導内容を創意工夫して欲しい。解説には、個々の子どもに合わせた指導内容を設定し、教材を選定していく必要性が述べられている。共通の手法や技法はあるが、それらをそのまま個々の子どもの自立活動の指導に当てはめると無理が生じてくる。共通のものを生かし、組み合わせながら、個々の子どもに適合した指導をどう作っていくか、そのためにはどのようなことを考えていかなければならないかということが書かれているので、確認して欲しい。

本日の資料の後半部分の、研修参加の情報を、校内で共有していこうとしている取り組みは素晴らしいと感じた。専門的な知識や技能を、ぜひ学校内にひろげていって欲しい。